

養護実習前後における養護教諭志向および適性感の推移

小楠 範子

要 旨

本研究の目的は、養護実習前後における学生の養護教諭志向状況および適性感の推移を明らかにすることである。養護実習前後に養護教諭志向状況および適性感に関する調査を行い、実習前後の比較を行った。研究対象者は平成 X 年 5 月～6 月に養護実習を行った看護学科の 4 年生のうち、研究に承諾の得られた 23 名である。

分析の結果、養護教諭志向度は、実習前は「ぜひ働きたい」「できれば働きたい」をあわせて 47.8%であったのに対し実習後は 78.2%であった。養護教諭適性感は、「やや適している」と回答した者は、実習前に 13%であったのに対し、実習後は、47.8%であった。卒業直後の就職希望の職種は、養護教諭 17.3%、看護師 82.6%であり、実習前後でまったく変化がみられなかった。

学生は、養護実習によって自身の養護教諭適性感を吟味しており、総体的に実習後では学生の養護教諭適性感が高まっていることが明らかになった。また実習の経験は学生の養護教諭への志向度を高めるものであったが、その志向度は必ずしも卒業直後の就職希望の職種にはつながっていない実態も明らかとなった。

キーワード：養護実習 養護教諭 養護教諭志向度 養護教諭適性感

I . はじめに

専門職の実践的能力を育成するためには、基礎となる理論を学ぶとともに、現場における実地体験が必要となる。この体験が養護教諭の場合は「養護実習」であり¹⁾、養護教諭の資格を取得するためには、教育職員免許法の規定により養護実習の単位を取得する必要がある。大谷¹⁾は、養護実習の意義として、第一に大学での学びを具体的な教育実践場面において検証する学びの統合の場であること、第二に養護教諭としての適性、可能性を量る場であることを提示している。

本学における看護学科では、養護教諭一種免許状の取得が可能である。養護教諭を希望する学生は、看護師・保健師国家試験の受験資格を取得すると共に、教職科目を履修し単位を修得することで、養護教諭一種免許状を取得している。

本研究は、養護教諭としての適性を探る上でも重要な体験の場である養護実習において、本学の看護学科の学生が、養護教諭としての自らの適性をどのように感じ取っているのか、またどのような養護教諭志向をもってしているのかを探るものである。

II . 研究目的

養護実習前後における学生の養護教諭志向状況および適性感の推移を明らかにし、学生にとっての養護実習の意義および課題を検討する。

III . 研究方法

1. データ収集および分析方法

養護実習前後に養護教諭志向状況および適性感に関する調査を行い、実習前後の比較を行った。養護教諭志向状況に関しては、将来養護教諭として働きたいと考えているかについて、5 件法で回答を求めた。養護教諭適性感に関しては、養護教諭という職業に自分が適していると思うかについて問い、5 件法で回答を求めた。それぞれ実習前後で調査を行い、単純集計を行った。また、養護教諭志向の理由や養護教諭適性感について自由記述欄を設け、自由記述の分析も並行して行った。

2. 研究対象者

研究対象者は平成 X 年 5 月～6 月に養護実習を行った看護学科の 4 年生のうち、研究に承諾の得られた 23 名である。

3. 倫理的配慮

研究参加者には研究の趣旨および方法を口頭と文書で説明し、研究参加を断っても実習成績には一切関係のないこと、研究以外の目的でデータを使用しないこと、得られたデータは個人が特定されないよう配慮する旨を伝え、調査回答用紙の提出をもって研究への同意とみなした。

IV . 結 果

以下に単純集計の結果と自由記述の分析結果を示す。なお、自由記述の分析結果では＜ ＞はカテゴリ一名を示し、「 」は学生の記述の引用を指している。

1. 養護教諭として働く意思

(1) 養護教諭志向度 (図 1)

養護教諭志向度は、実習前は「ぜひ働きたい」「できれば働きたい」をあわせて 47.8% (23 名中 11 名) であったのに対し、実習後は 78.2% (23 名中 18 名) であった。

(2) 養護教諭志向度を高めた要因

自由記述から養護教諭志向度を高めた要因を分析したところ、＜漠然としたイメージから明確な養護教諭像の描写＞＜こどもとかかわり育てていくことの魅力の発見＞＜教育現場における養護教諭の重要性の実感＞の 3 つのカテゴリーが見出された。

＜漠然としたイメージから明確な養護教諭像の描写＞は、実習前は養護教諭に対して漠然としたイメージしかもっていなかった学生が、実習を通して学校という現場の中で養護教諭と実際にかかわり、その職務に共に携わる機会をもつことで、養護教諭の像が明確になったことを指している。漠然としたイメージの養護教諭像が実習を通してより明確な養護教諭像に変化することで、学生は「これなら自分もやってみたい」という思いをもち、養護教諭志向を高めることにつながっていた。

＜こどもとかかわり育てていくことの魅力の発見＞は、実習を通して児童・生徒（以下、こども）とかかわる機会をもった学生が、実際のかかわりを通して、自分自身がこどもとかかわりが好きであることを実感すると共に、養護教諭はこどもとかかわるだけでなく、そのかかわりを通してこどもを育てていく役割があることを実感していることを指している。この養護教諭の役割は

学生にとってとても魅力的なことに映り、「自分もやってみたい」という養護教諭志向へとつながっていた。

＜教育現場における養護教諭の重要性の実感＞は、実習を通して様々な体験を積んだ学生が、その体験を振り返る中で、教育現場においてこどもの成長発達を支えるにあたって、養護教諭はなくてはならない重要な存在であることを実感していることを指している。教育現場の中で養護教諭にしかできない役割があることを発見した学生は「自分もやってみたい」という思いをもち、養護教諭志向を高めることにつながっていた。

2. 養護教諭としての適性

(1) 養護教諭適性感 (図 2)

養護教諭適性感は、「とても適している」と回答した者は、実習前後ともにいなかった。「やや適している」と回答した者は、実習前に 13% (23 名中 3 名) であったのに対し、実習後は、47.8% (23 名中 11 名) であった。

(2) 養護教諭適性感を促進した要因

自由記述から養護教諭適性感を促進した要因を分析したところ、＜自分の中にある「こどもへの関心」の発見＞＜「養護教諭としての役割を果たせた」実感＞の 2 つのカテゴリーが見出された。

＜自分の中にある「こどもへの関心」の発見＞は、実習前は、自分の中に「こどもへの関心」があることをほとんど意識していなかった学生が、実習を通して「こどもとかかわりが好き」な私、「こどもとかかわると自分は生き生きする」ことに気づき、自分の中にある「こ

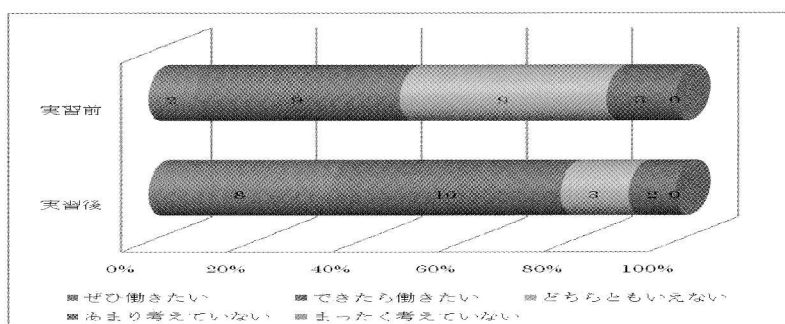


図 1 養護教諭志向度

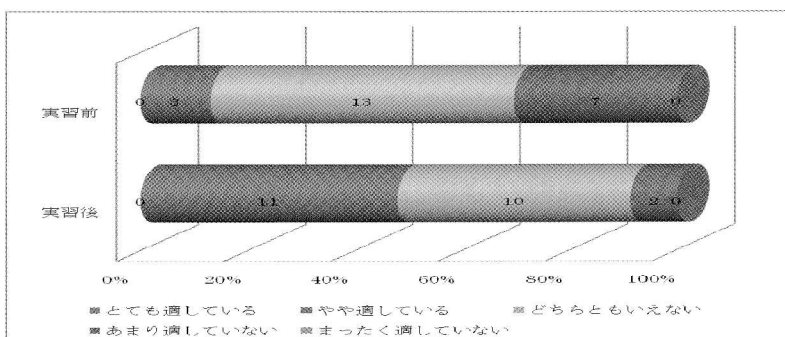


図 2 養護教諭適性感

どもへの関心」を発見していることを指している。こどもへの関心が高く、かわいがりが好きな自分の傾向に気づいた学生は、こどもとのかかわりが好きで関心のある私は養護教諭に適していると判断していた。

＜「養護教諭としての役割を果たせた」実感＞は、実習中、養護教諭のサポートを受けながら様々な養護教諭の職務を体験した学生が、実習中、単に学生としてではなく、「養護教諭として役割を果たせた」という実感をもつ体験をしていることを指している。

「養護教諭として役割を果たせた」という実感をもつ体験は、例えば、「保健室に来る生徒だけでなく、それ以外の生徒にも目配りができた」「悩みをかかえて来室した生徒にかかわり、その生徒が笑顔で教室に帰って行った」「生徒がかかえる課題を担任とはまた違った角度から見る事ができた」ということであった。背後で養護教諭のサポートを受けながらも学生が主体的にこどもたちにかかわり、それなりの達成感を得られた体験は、学生にとって養護教諭適性感を促進することにつながっていた。

(3) 養護教諭適性感を抑制した要因

自由記述から養護教諭適性感を抑制した要因を分析したところ、＜養護教諭の職務を一人で果たすことの困難さの実感＞＜日々の判断、救急時の判断が未熟であることの実感＞の2つのカテゴリーが見出された。

＜養護教諭の職務を一人で果たすことの困難さの実感＞は、実習中、養護教諭のサポートを受けながら養護教諭の職務を実践し、日々の実習記録を通してその実践を振り返り、養護教諭としての学びを積み重ねた学生が、養護教諭の役割の重要性を実感する一方で、その職務を一人で果たすことの困難さを実感していることを指している。

学生は、「実習中は養護教諭のサポートがあったが、実際はこれを一人でしなければならないので不安」「多岐にわたる養護教諭の職務を一人で果たすことは大変」と実感しており、「実際に自分ができるかどうか不安」という思いを抱いてもいた。そしてこの思いは養護教諭の適性感を抑制することにもつながっていた。

＜日々の判断、救急時の判断が未熟であることの実感＞は、実習中、ほとんどの学生は養護教諭のサポートを受けながら養護教諭の職務を実践していた。日々のこどもたちとのかかわりの中で自分なりに判断しながら行動した場面があったとはいえ、全ての場面を判断できることはもちろんできず、自分で判断に迷う場面では養護教諭のサポートを受けながらの実習であった。緊急を要する場面では学生は身動きできず、迅速に動く養護教諭の後姿を見ながら、後日その場面を振り返って養護教諭の行動の意味を振り返り、学びを整理するのが精いっぱいであった。理想的な養護教諭の活動を間近に見ることは、

学生にとっては、日々の判断や救急時の判断がまだまだ未熟である自分を実感することでもあり、その実感は、養護教諭の適性感を抑制することにもつながっていた。

なお、学生の自由記述には、養護教諭としての適性を促進する要因が記載されると共に抑制要因も記載されていた。つまり、同じ学生が養護教諭としての適性を促進する体験と共に抑制する体験も経験していることを指している。

3. 卒業直後の就職希望職種

卒業直後の就職で希望する職種は、養護教諭 17.3% (23 名中 4 名)、看護師 82.6% (23 名中 19 名) であり、実習前後でまったく変化がみられなかった。

卒業直後の就職希望に関する自由記述には「将来は是非養護教諭になりたい。学校内で一人で専門職としての役割を果たすために、まずは看護師として働き、救急時の判断ができるようになりたい」「実習を通して是非養護教諭になりたいと思ったが、採用試験が間に合わないの、まずは看護師として働きたい」といった記述がみられた。

V. 考 察

1. 養護教諭志向度を高める養護実習

本研究結果から学生は養護実習によって養護教諭への志向度を高めていることが明らかとなった。今野²⁾は、養護教諭になりたいという気持ちは実習後により高まったことを示しているが、本研究結果も同様の結果を示したことになる。

自由記述分析からは、養護教諭志向度を高める要因として＜漠然としたイメージから明確な養護教諭像の描写＞が見出された。養護教諭志向度を高めるためには、明確な養護教諭像の描写が不可欠であり、養護実習は学生が養護教諭像を明確に描写するのを助けるという点でも意義があることが示されたといえる。しかしながらこの結果は、学生が養護実習をスタートするまで漠然とした養護教諭像しか描けていなかった事実を示してもいる。永浜ら³⁾は、養護教諭関連科目を学ぶ前の学生が、養護教諭を保健室の先生という漠然としたイメージしかもっていなかったと述べているが、本研究結果も同様のことを示しているといえる。

本学の看護学科では養護教諭資格必修科目が看護師資格必修科目に重なりあっていることもあり、学生は養護教諭として必要な知識や技術を看護学の必修科目を学ぶ中で知らず知らずのうちに修得している。養護に関する科目として独立しているのは、「学校保健」「養護概論」「健康相談活動の理論及び方法」の3科目と「養護実習」のみである。他に教職全般に関する科目が開講されているが、これは他の教員免許希望者と同時に受講するものである。いいかえれば、「養護教諭」を全面に出した科

目は、「学校保健」「養護概論」「健康相談活動の理論及び方法」の3科目のみということになる。

永浜ら³⁾は、学生は養護教諭に対して漠然としたイメージしかもっていなかったものの、養護教諭関連科目受講後には漠然としたイメージから保健室を運営する主体者という認識に変化したことを報告している。また満田ら⁴⁾は、学生の養護教諭のイメージは専門の授業から養護実習を通して変化すると述べている。

養護教諭のイメージを大きく変えるのは養護実習ではあるが、その前段階の専門の授業も養護教諭のイメージを育てる上で重要であるといえるだろう。本研究結果は、看護学科のカリキュラムの特徴は、養護教諭を志す学生にとっては、養護教諭のイメージが描きにくいものであることを示唆しているともいえるだろう。したがって、「学校保健」「養護概論」「健康相談活動の理論及び方法」の限られた授業科目の中で、学生自身が養護教諭のイメージ像を描けるような授業展開の工夫が求められる。

養護実習の実施方式としては、臨地実習を最終学年かあるいはできるだけ卒業前に近い時期に1回だけ行う方式（以下、集中方式）と、臨地に出かける機会を複数設定し、1年生の時期から「現場」に出かけて問題意識をもって大学での授業に参加させ、実地体験と大学での授業を重ねながら研究的思考を踏む方式とがある（以下、分散方式⁵⁾）。集中方式、分散方式ともに長所と短所とをもちあわせているが、分散方式で低学年から実施体験を踏む長所の一つとしては、現場に触れたことで問題意識が高まり、大学での学びに積極的になれるということがあげられている⁵⁾。低学年から現場に触れることで、養護教諭のイメージ像が徐々に描かれ、イメージが高まることで問題意識も高まり、学内での能動的な学びへとつながっていくものと推察される。本学の看護学科の養護実習は集中方式をとっており、先に述べた分散方式の長所を学生に還元することができない。養護教諭のイメージ像が描けないままの専門科目の受講は、学生の学びの姿勢を受動的なものにしてしまう恐れもあるといえ、学生ができるだけ早い段階で養護教諭のイメージ像が描けるような工夫が求められているといえるだろう。藤平田⁶⁾は、学校インターンシップに参加した学生の約8割が教職員の実務を含む学校の実態を理解したという結果を示し、インターンシップの教育効果を報告している。したがって、養護教諭希望者に関しては、養護教諭に焦点をあてた低学年からのインターンシップの活用を促し、現場実践と理論をつなげる環境づくりを検討していくことも求められているといえよう。

2. 養護教諭適性感を知る養護実習

本研究結果から学生は養護実習によって自身の養護教諭適性感を吟味しており、総体的に実習後では学生の養

護教諭適性感が高まっていることが明らかになった。しかしながら、自由記述では、養護教諭適性感を促進する要因、抑制する要因の両面が記載されていた。この結果は、学生が実習を通して、養護教諭という職種を専門として選んだ場合の自らの課題にしっかりと向き合っていることを示しており、その上で自身の養護教諭適性感を見極めていることを示しているものと思われる。養護教諭適性感を促進する要因は、養護教諭としての手ごたえを感じた部分であり、抑制する要因は養護教諭としてまだまだ力不足の点、すなわち養護教諭を目指すにあたって学生自らが実感した課題ととらえることができる。また、養護教諭適性感で「とても適している」を選択している学生が皆無だった結果は、養護教諭としての適性感を感じながらも、その一方で自らが克服しなければならない課題を学生がしっかりと見出していることの表れともいえるだろう。

大谷¹⁾は、養護実習は実習生自らの養護教諭としての適性を図る機会であるとし、実習生自らが今後の研鑽すべき課題を発見し、自己の描く養護教諭像に近づける見通しをもつことができるようになることを養護実習の意義の一つとしてあげている。したがって、自らの課題を自分の言葉で言語化できたことは、実習における大きな成果の一つとみなすことができるだろう。

養護教諭適性感を抑制した要因、すなわち学生自身が感じた自らの課題としては、＜養護教諭の職務を一人で果たすことの困難さの実感＞＜日々の判断、救急時の判断が未熟であることの実感＞があげられている。学生がとらえたこれらの課題については、実習の事後フォローの時間を活用し、課題を克服していく糸口を見いだせるようなサポートが求められるであろう。学生それぞれの実習体験を交えてのグループ討議を行うなどの機会を設け、課題を全体で共有することも重要だと思われる。

養護教諭適性感を促進した要因としては、＜自分の中にある「こどもへの関心」の発見＞＜「養護教諭としての役割を果たせた」実感＞があげられた。

養護教諭の職務は「児童・生徒の養護を掌る」ことであり、養護実習においては、養護の対象であるこどもの心身・生活の状況および彼らの健康問題の特質を理解することも大事な実習目標の一つとして位置づけられる¹⁾。そして、こどもの健康問題の特質を理解するためにはまず発育発達過程にあるこどもの特質を理解する必要がある。こどもの特質を理解するためには、まずは実習生自らが積極的にこどもとかわる必要があり、そこには「こどもへの関心」が不可欠となる。＜自分の中にある「こどもへの関心」の発見＞は、養護教諭を目指す学生にとって、養護教諭としての適性感を見極める大事な一歩といえるであろう。

また、本研究において＜「養護教諭としての役割を果

たせた」実感>が養護教諭適性感を促進していることが明らかとなった。今野²⁾は、学生が養護実習において力を発揮できた体験は、養護教諭の適性感につながることを指摘しており、本研究結果もこれを裏付ける形となった。

養護実習の方法としては、「講話」「観察」「参加」「実習(実地)」があげられる⁵⁾。このうちの実習(実地)は、指導教師の指導を踏まえながら、実習生自身が主体的に計画を立案し、直接的にこどもにかかわったり、養護活動を推進していったりすることを指している。本研究結果は、学生の養護教諭適性感を見極めるためには、単に「講話」「観察」「参加」だけでなく、学生が主体的に行動できる「実習(実地)」をバランスよく組み込むことの重要性を示唆するものといえる。

学生は、「悩みをかかえて来室した生徒にかかわり、その生徒が笑顔で教室に帰って行った」「生徒がかかえる課題を担任とはまた違った角度から見る事ができた」経験を通して、<「養護教諭としての役割を果たせた」実感>をもっていた。これらは健康相談活動の一端として学生がこどもたちに主体的にかかわる実習をしていることを示している。保健室でこどもの身体への応急手当を行いながら、こどもの心配や不安などの話を受容・共感的に聴き、それによってこどもが情緒的に安定する過程は、健康相談の基本系⁷⁾であるが、これは複雑な課題をかかえた継続型の健康相談と異なり、学生が主体的に実施できる健康相談の形でもある。したがって、健康相談の基本系に関しては、実際の場面で学生が積極的に主体的に取り組めるよう、健康相談活動の理論と方法の講義においてはもちろんのこと、実習事前準備の中でも演習を組み込むなどの工夫が求められる。また、学生が主体的に取り組める保健指導などを実習事前準備として強化していくことも重要になるとと思われる。

3. 変動しない卒業直後の就職希望

本研究において、卒業直後の就職で学生が希望する職種が養護実習前後でまったく変化がみられないことが明らかとなった。これは、実習後の養護教諭志向の向上が卒業直後の就職希望には必ずしも反映されないことを示すものであった。

自由記述には「将来は是非養護教諭になりたい。学校内で一人で専門職としての役割を果たすために、まずは看護師として働き、救急時の判断ができるようになりたい」とあり、看護師免許という看護学科特有の資格をベースにしながら養護教諭として独り立ちしたいという学生のニーズが表現されている。これは卒業直後に看護

師での就職を希望した学生も完全に養護教諭としての就職の希望を断ち切っているわけではないことを示すものであり、卒業数年後の養護教諭希望者へのフォローのありようについても検討していくことが求められるであろう。

また、「実習を通して是非養護教諭になりたいと思ったが、採用試験が間に合わないので、まずは看護師として働きたい」といった記述からは、集中方式の実習で、4年生の5月6月という教員採用試験直前の時期に養護実習を行っている看護学科の養護実習の方法と実習時期についての検討も求められるともいえる。とはいえ、看護必修科目としての臨床実習との兼ね合いもあり、看護学科における養護実習の方法と実習時期を検討しなおすことは容易ではない。養護教諭志向の学生の希望をできるだけ叶えるためにも、養護教諭としての適性を見極める体験としてのインターンシップ⁶⁾ ⁸⁾を低学年から活用する取り組みが重要になるとと思われる。

謝 辞

本研究にご協力いただきました皆様に感謝いたします。

文 献

- 1) 大谷尚子：養護実習の意義と目標. 大谷尚子, 中桐佐智子:養護実習ハンドブック. 第2版, 東山書房, 東京, 2009, 11-19
- 2) 今野洋子：養護実習における学生の適性感の分析. 人間社会福祉研究, 10: 93 - 107, 2007
- 3) 永浜明子, 宮城政也：看護大学生の養護教諭に関する認識変化. 沖縄県立看護大学紀要, 6: 64 - 73, 2005
- 4) 満田タツ江, 今村朋代：養護教諭のイメージに対する志向性や適性感の変化. 鹿児島女子短期大学紀要, 41: 193 - 202, 2006
- 5) 大谷尚子：養護実習の内容と方法. 大谷尚子, 中桐佐智子:養護実習ハンドブック. 第2版, 東山書房, 東京, 2009, 20-31
- 6) 藤平田英彦：学校インターンシップの教育成果報告. 創大教育研究, 14: 81 - 84, 2005
- 7) 森田光子：健康相談の概念と特質. 大谷尚子, 森田光子:養護教諭の行う健康相談活動. 第8版, 東山書房, 東京, 2009, 25-38
- 8) 浅野浩子, 植竹由美子：キャリア教育としてのビジネス・インターンシップ. 仙台白百合女子大学紀要, 10: 89 - 104, 2006

Changes in Intention to Become a Yogo Teacher and Feeling of Aptitude for the Job Before and After a School Apprenticeship

Noriko Ogusu

Department of Nursing, Faculty of Nursing and Nutrition,
Kagoshima Immaculate Heart University

Key words : yogo apprenticeship at a school, yogo teacher,
intention to become a yogo teacher,
feeling of aptitude for the job of a yogo teacher

Abstract

The purpose of this study was to clarify the intention in students to become a yogo teacher and feeling of their own aptitude for the job before and after participating in a yogo apprenticeship at school. A survey was conducted regarding the intention to become a yogo teacher and feeling of aptitude for the job prior to and following an apprenticeship at a school, and the results were compared before and after the apprenticeship. The subjects of the research were 23 seniors in a nursing program who participated in an apprenticeship from May to June, 20XX, and who consented to participate in the study.

Results regarding the intention to become a yogo teacher showed that 47.8% of combined responses "Definitely want to work as" and "If possible want to work as" prior to the yogo apprenticeship had increased to 78.2% after the apprenticeship. Regarding the students' feeling toward their own aptitude for becoming a yogo teacher, 13% of respondents answered "I'm somewhat suited for the job" prior to the apprenticeship, while 47.8% chose this answer after the apprenticeship. In regard to the type of job they would like to get immediately upon graduation, 17.3% selected yogo teacher and 82.6% selected nurse, with no change at all observed before and after the apprenticeship.

The school apprenticeship made the students take a close look at their own feeling of aptitude for being a yogo teacher, and overall it was clear that their feeling of aptitude for the job had increased following the apprenticeship. The apprenticeship experience also boosted the students' degree of intention to become a yogo teacher, but it also became clear that the intention did not necessarily tie in to the type of job that they desired to get immediately upon graduation.
